

カルデシズム信者の活動

カルデシズム信者はどのような活動をしているのだろうか。筆者が行った現地調査をもとに活動内容をみてみよう。

表1は、ペルナンブコ州レシーフェ市にある「キリストと慈善の心霊主義再生センター」と呼ばれる、ある標準的なカルデシズム・センターにおける1週間の活動内容である。センターをはじめ訪れる人の場合、自身の苦難について相談してそれを解決するために、毎週水曜日に行われるコンスウタ（診察）を受ける。相談者は必ずしも信者であるとは限らない。コンスウタでは霊媒師が訪問者の問題の原因がどこにあるのか診断してくれる。相談料は無料である。比較的大きな規模のセンターになると、1週間後のコンスウタで結果が書面で渡されるが、小規模のところでは、その場で霊媒師が答えることが多い。

結果で明らかにされる苦難の原因は、霊が関わっている場合とそうでない場合とに分けられ、たいていの苦しみは霊の障りによると考えられている。その場合、相談者は霊媒師の手かざしによる霊的治療（パッセ）を受け、カルデシズムの教義勉強会に参加し、後述する「スープの日」のような慈善活動に参加することで苦難が除かれるとされる。それらの実践は、霊の障りを取り除き、当事者の霊の進化（救済）を導くという。こうしたプロセスを経て、その中から信者が生まれることになる。入信式のような儀礼はなく、入信は自由である。なお、霊が原因でない場合には、近代医学による治療を受ければよいのである。

コンスウタで指示された活動に参加するか否かは、個人の自由に任されている。カルデシズムでは個人の意志は尊重されるべきものとされ、救済されるか否かは当人の努力次第と理解するからである。活動にはさまざまな階層の人びとが参加しているが、中間層と低所得者層に大別できる。前者は、センターでの教化活動に積極的で、慈善活動に与しようとする人びとである。勉強会やパッセ、霊媒師の集会などに参加して困窮する人々を救いたいという意識を持っている。後者はセンターが提供する慈善活動の受益者である。センターでは週2回、信者が集めた食料品の無料配布（キロ・キャンペーン）を行っており、それを目当てに集まっている。

月	18:45-20:30	霊能力開発の勉強会
火	19:00-21:00	パッセ、遠距離治療のための霊媒師師集会
水	17:00-21:00	パッセ、コンスウタ（診察）、教義勉強会
木	19:00-21:00	パッセ、子どもための福音
金	19:00-21:00	遠距離治療のための霊媒師師集会
土	18:00-20:00	子どもための福音、教義勉強会
日	8:00-	キロ・キャンペーン（第1、第3日曜）
		ハンセン病患者訪問（第2日曜）
		癌病院訪問（第4日曜）
	18:00-20:00	パッセ、教義勉強会、脱憑依のための霊媒師師集会

(表1) 1週間の活動内容

ここで、キリストと慈善の心霊主義再生センターで行われている勉強会と慈善活動について若干の説明をしておこう。

勉強会

勉強会は、教義勉強会（講義と読書会）と霊能力開発からなる。教義勉強会は週3回行われ、センターのメンバーが講師を務めるか、他のセンターから招待される。講義内容はカルデシズムの教義に関することからで、筆者が参加したものでは「霊界と世界認識」、「クロモセラピー」、「パッセ」などであった。また、読書会はセンターで個人的に開かれることが多く、家庭でも開

催することが推奨されている。読書会で読まれる本はアラン・カルデックが著した『諸霊の書』、『霊媒師の書』、『エスピリテイズモによる福音』であるが、ブラジルのカルデシズムの「法王」と呼ばれるシコ・シャビエール（1910～2002）の著作も好んで読まれる。シコは自身に降霊するさまざまな霊の言葉を筆記して、200冊を超える書籍を出版している。

教義勉強会同様、霊能力開発の勉強会にも誰でも参加することができる。カルデシズムでは人は潜在的に霊媒師だといわれる。参加者は訓練を重ねることで、その能力を意識的にコントロールすることができるようになるという。筆者が参加した霊能力開発の勉強会では、霊視能力を高める練習が行われた。暗闇の中、リーダーが「霊」を呼び寄せ、その「人物」が見えた人はどのような姿をしているか説明するというものだった。その後、熟練した信者が降霊を行い、霊界に住んでいるという「人物」画をクレヨンで描いたり、霊を憑依させたりしていた。

慈善活動

カルデシズムでは、自分が救済されるには他者に慈善を施すことが重要だと説いている。それによって過去に犯した罪や過ちという負債を支払うと同時に、神から徳分（メレシメント）が与えられるという。筆者が同行した「スープの日」と呼ばれる活動では、夜7時頃からレシーフェ市内にある貧民街を2カ所回り、信者が準備したスープとパンを配るといったものだった。参加した信者は全員で8名だった。配給物品を乗せたわれわれの小さなトラックが貧民街に近づくと、クラクションを鳴らして「スープだよ」と大声で叫ぶ。そうすると、薄暗い橋の下から小さな子どもたちと女性がうす汚れたお鍋やこわれかけたマーガリンのケースをもって駆けてくる。集まった住人はそれぞれ40名程度だった。最初に信者のあいだで神への感謝と祈りの言葉が唱えられ、配給がはじまる。配給を始める前に住民も祈りに参加するように促すが、いわゆる教化活動は行わない。信者らと一緒に祈りを捧げる住人はごく少数だった。

筆者は、参加者の一人の信者に、こうした活動は住人をたんなる受益者に止めてしまうことになりはしないか、とたずねてみた。彼女は、「スープの日」によって神への祈りさえできない人たちが祈りと感謝の機会を持つことに意味があると答えた。そして、いずれカルデシズムの教えを学んでくれるようになればいいのだとも語った。信者らは、社会的かつ経済的格差は輪廻で伝えられる徳分がこの世において現れた結果だと理解する。ある女性信者は、「人間は徳分に相応しい生活をしている。その意味で貧困者も裕福な人も平等だ」と語る。貧困層の人びとが貧しい生活を強いられるのにはそれなりの理由があるというのである。さらに、「社会は不公平だけれども神は不公平ではない」とも言う。また、「裕福な人が貧しい人の世話をしなければ、やがて貧困に陥ることになる」とも語った。

慈善活動で確認されるのは、与える側の者の霊的レベルでの救済である。スープを受け取る人々は文字通りの受益者であり、物質的に救われる人々だが、霊的レベルでの救済には与っていない。信者らは、受益者もまた慈善活動に主体的に参加することに目覚めれば、霊的レベルで救済されるようになるという。カルデシズムにおいて、霊の進化による救済は、与えられるものでなく、求めなければならないものである。